

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 23 日現在

機関番号：32653

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26893282

研究課題名(和文) 精神障がい領域のピアサポーターと働く専門職者の経験

研究課題名(英文) The experiences of professionals working with peer supporters in the mental health field

研究代表者

濱田 由紀 (HAMADA, YUKI)

東京女子医科大学・看護学部・准教授

研究者番号：00307654

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、精神障がい領域のピアサポーターと働く専門職者の経験を明らかにすることである。研究参加者18名に、1対1での面接調査を行った。研究参加者がピアサポーターと勤務した場所は、医療施設、福祉施設で、当時の職種は、精神保健福祉士、看護師、臨床心理士、医師、作業療法士であった。ピアスタッフと働く経験は、精神障がいを経験した人と支援者・被支援者関係ではない関係を構築するという意味をもち、働くもの、支援者、困難を抱える当事者等の共通の立場をもつ関係をつくる契機となっていた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research was to explain the experiences of professionals who work with peer supporters in the mental health field. We interviewed 18 professionals who participated in this research; all interviews were "1 to 1". The peer support professionals worked in medical and a welfare facilities and comprised psychiatric social workers, nurses, clinical psychotherapists, doctors and occupational therapists. The experience of working with peer staff carries a meaning of establishing a type of relationship in which the professional and the peer supporter are not "Supporter" and "Receiver". The experience was an opportunity for the professional to have a common standpoint between the worker, supporter, individual with a problem, etc.

研究分野：精神看護学

キーワード：精神障がい ピアサポーター 専門職 協働

1. 研究開始当初の背景

ピアサポートは精神障がいを経験した人々のリカバリーに重要な契機となることが明らかになり、米国では州によってピアスペシャリストという認定資格を創設し、メディケイドの償還対象になっている (Salzer, 2010)。我が国でも 2011 年には米国のピアスペシャリストを参考にしたガイドラインが作成され(びあ・さぼ千葉, 2011)、精神障がいピアサポート専門員の研修が開催されるようになった。

ピアサポートは精神障がいを経験した当事者のリカバリーを促進するものであるとともに、これまでの研究からメンタルヘルシステムや専門職者を変化させるものとしても認識されている。ピアサポートを職業として行う人は、サービス受給者であり、サービス提供者であるという新しいポジションをつくることとなる(相川, 2013)。そのことにより、これまでの固定化した伝統的なメンタルヘルシステムや専門職者の役割は、揺さぶられ、葛藤を生じるものとなることが予測される。ピアサポーターが新たな職種としてメンタルヘルケアシステムに参画し、変革が期待される中で、専門職者がどのような意識の変容や葛藤を経験するかを明らかにすることは、専門職の新たな課題を明確にするものと考えられる。

2. 研究の目的

精神障がい領域のピアサポーターと働く精神保健福祉士、看護師、医師等の専門職者の経験を明らかにし、精神障がい領域のピアサポーターと協働するうえでの専門職側の課題や対応について検討することである。ピアサポート、peer support は「平等な立場にある仲間による支援、仲間同士の支援」であり、精神障がい領域のピアサポーターとは、精神障害の経験を生かしてピアサポートを行う者である。本研究におけるピアサポータ

ーとは、ピアサポートを行うことで経済的な報酬を受けている者を指すこととする。

3. 研究の方法

研究デザインは、質的帰納的研究デザインとした。研究参加者は、精神障がい領域のピアサポーターと過去 3 年間のあいだに 1 年以上一緒に働いた経験をもつ精神保健福祉士、看護師、医師等の専門職者とした。調査方法は、1 対 1 での面接で、被験者の了解を得て、筆記記録・IC レコーダで記録し、面接終了後できるだけ早い段階で録音された内容を逐語録として起こしてデータとした。データは Denzin (1989 / 片桐, 1992) の解釈的相互作用論による分析を用いて解釈を行った。研究期間は、2015 年 1 月～2016 年 3 月であった。

研究における倫理的配慮として、研究参加者に対し、同意説明文書を用いて、研究参加・撤回の自由、研究の意義、目的、対象、方法、実施期間等を説明し、自由意志による同意を文書で取得した。研究の実施に係る文書や記録、研究結果の公表において、研究参加者の匿名性の確保と個人情報の保護を行い、研究終了後 5 年の時点で個人情報に注意して廃棄する。東京女子医科大学倫理委員会の承認を受けておこなった(承認番号 3308)。

4. 研究成果

(1)ピアサポーターと働く専門職者の経験に関するインタビュー調査

研究参加者の背景

研究参加者は、女性 12 名、男性 6 名の計 18 名であった。研究参加者がピアサポーターと働いた場所は、医療施設 3 施設、福祉施設 6 施設の計 9 施設であった。平均年齢は、41.9 歳(範囲 29-65)、ピアサポーターと働いた当時の職種は、精神保健福祉士 7 名、看護師 6 名、臨床心理士 3 名、医師 1 名、作業療法士 1 名であった。

ピアサポーターと働く専門職の経験

ピアサポーターと働く専門職の経験は、A. 支援者・被支援者を超える関係の構築、B. 当事者中心・リハビリ志向の支援の実現にむけた活動、として経験されていた。

A. 支援者・被支援者を超える関係の構築

ピアサポーターと働く経験は、ともに働く専門職にとって支援者・被支援者関係ではない関係を構築するという経験であり、働くもの、支援者、困難を抱える当事者として共通の立場をもつ関係をつくる契機となっていた。

働くものとしての関係の中では、「どのように生きたいか」という文脈の中で、ピアサポーターの働くということへの動機・ストーリーを理解することとともに、職場の一職員としてのピアサポーターの教育・指導に関わること、同僚としてサポートを行うこと、共に勉強会等に参加すること等が行われていた。その中には仕事をする、人を支援する仕事の大変さも共有し、ともに引き受けることも含まれていた。病気については基本的に自己管理できることが求められており、仕事の範囲でのサポートや助言を行うものと捉えられていた。しかしながら、調子が悪くなった時に生活支援しなければならなくなることへの危惧や、再発や離職となったときの専門職としての自責感についても語られ、それらが雇用の際の懸念となっていることも示唆された。障害者雇用という側面では、障害特性や合理的配慮をどのように行うかという課題が模索されていた。

専門職としての関係では、ピアサポーター固有の支援の有無において、2つの立場があり、支援機関の一職員であり誰もが個性をもった職員として同じであるという立場と、精神障がい経験を生かしたピアサポーター固有の支援のあり方について語る場合があった。ピアサポーターという新しい職種が今後どのような役割・機能を果たしていくのか

については、ピアサポーター自身が今後作り上げていくことが期待されていた。対人支援をする仕事では、カウンセリングやコミュニケーション等仕事におけるスキルを身に付けている必要があるが、同時にピアサポーターの教育やトレーニングを専門職が主導してはいけないことの自戒も語られていた。

ピアサポーターの支援の強みとして、ピアサポーター自身の経験を支援に生かすこと、当事者としての立場や視点をケアやスタッフに提供すること、寄り添う・パートナーシップをつくる態度、専門職とは異なる新しいアイデアや発想をもっていること、リハビリモデルになること等が語られた。ピアサポーターがチームに参加することで、チームとして支援の幅が広がるものと捉えられていた。

一方、職場におけるピアサポーターの役割業務を明確にすることは、雇用者側の責任として捉えられていた。また専門職側の課題として、当事者の力やリハビリへの信頼、患者や障がいをもつ人自身の選択を尊重すること、協働する能力、効率中心の業務、などが挙げられた。

問題をもつ当事者としての関係では、インタビューの中で、研究参加者自身の健康問題と仕事における対処がピアサポーターの活動と関連付けて語られることがあった。

B. 当事者中心、リハビリ志向の支援の実現にむけた活動

ピアサポーターを雇用した経緯やピアサポーターのいる職場の選択には、リハビリ志向の実践や教育の広がり、我が国で発展してきた地域精神保健の先駆的な取り組みの経験、ピアサポートに触れた経験、当事者から教えてもらった経験、WRAPの立ち上げや、当事者と専門職がともに集う講演会・学会等への参加、といった歴史的・社会的出来事が個人の動機に直接的な影響を与えていた。このような背景の中で、ピアサポーターと働く

ことは、当事者中心あるいはリカバリー志向の支援の実現にむけた活動として経験されていた。

ピアサポーターの雇用と同時に、リカバリー志向の地域・組織文化を作り上げることが行われていた。組織理念の明確化、研修、ピアサポート講座の開催、リカバリー関連の研究や事業への参加、ミーティングを重視したチーム運営、スーパーバイザーの活用等が、ピアサポーターとの協働を支える土台となっていた。

精神保健医療福祉システムにピアサポーターがもたらすものと今後の課題

戦後長きにわたり入院医療施設における処遇が続いた我が国において、専門職は精神障がいを経験した人と支援・被支援という固定化した関係を長く持ち続けてきたといえる。ピアサポーターと働くことは、支援・被支援の関係を超え、働くもの、専門職、問題をもつ当事者、という共通の基盤で関係をもつことを経験する契機となっていた。それらは、専門職者自身が、精神障がいを経験した人のリカバリーを本当に信じることを意味しており、市民として当たり前地域で生活し、仕事をして自分の望む生活を達成するリカバリーを現実的なものにするにつながっているものといえる。自らの関係の持ち方を含む、専門職支援や精神保健医療福祉システムのあり方を検討することは、リカバリーを実現する社会の構築に寄与するものと考えられた。

ピアサポーター自身による実践の蓄積、役割・機能の明確化が期待されるとともに、専門職者がリカバリーを信じ、協働するうえで必要とされる労働における配慮を行うことについて、実践からの知見を蓄積していく必要がある。

(2)ピアスタッフと専門職の協働の可能性を検討するワークショップの企画

平成 27 年 6 月日本精神保健看護学会第 25

回学術集会にて、ワークショップ「ピアと協働してつくるメンタルヘルスサービス」を企画、開催し、専門職とピアスタッフとの協働の可能性について検討した。

<引用文献>

相川章子(2013).精神障がいピアサポーター.中央法規出版、東京.

Denzin,N.K.(1989)/片桐雅隆他訳(1992).エピファニーの社会学 解釈的相互作用論の核心(第1版).マグロウヒル出版、東京.

Salzer, S.M. (2010). Certified Peer Specialists in the United States Behavioral Health System: An Emerging Workforce. Brown, L.D.& Wituk, S. edit., Mental Health Self-Help Consumer and Family Initiatives (1st Ed). Springer, New York, 1-15.

特定非営利活動法人ぴあ・さぼ千葉(2011).厚生労働省平成22年度障害者総合福祉推進事業「ピアサポートの人材育成と雇用管理等の体制整備のあり方に関する調査とガイドラインの作成」報告書.

5. 主な発表論文等

[学会発表](計1件)

(1)濱田由紀、安保寛明:ワークショップ「ピアスタッフと協働してつくるメンタルヘルスサービス」、日本精神保健看護学会第25回学術集会、2015年6月27日、つくば国際会議場(茨城県つくば市)

6. 研究組織

(1)研究代表者

濱田 由紀 (HAMADA, yuki)

東京女子医科大学・看護学部・准教授

研究者番号:00307654